

心態詞の統語論研究における形式と意味の関係について

土肥 篤

1. はじめに

いわゆる心態詞 (modal particles) は談話標識 (discourse markers)、談話辞 (discourse particles)、語用論標識 (pragmatic markers) などとも呼ばれ、ドイツ語をはじめとして盛んに研究されている(比較的近年の概観に Bayer & Struckmeier 2017; 用語法については Fedriani & Sansó 2017 も参照)。このうち、とりわけ生成文法の枠組みによるものは、心態詞が持つ意味とその統語的特徴の相互作用に注目し、談話に関わる現象を統語論によって捉える試みと合流して展開されてきた (§ 2.1、また Bayer et al. 2015b の序章および収録論考を参照)。

心態詞は主に時間や様態を表す副詞と形式を同じくし、その一方で、少なくとも直観的には対応する副詞と異なる意味を持つことがしばしば指摘されている (Autenrieth 2002; Schoonjans 2013)。次に挙げるイタリア語の例では、*poi* という表現が(1a)では(時間の)副詞として、(1b)では心態詞として用いられている。(1b)は単に話し手が聞き手に情報を求めているものとは解釈されず、話し手と聞き手が共に回答を持たないという話し手による推測を表現する。以下では、当該形式が持つ二つの意味と結びつく性質を指して、意味の二重性と呼ぶことにする。

- (1) a. Lo faccio *poi*.
「後でやる。」 (Cardinaletti 2011: 515)
- b. Chi avrà *poi* telefonato?
「誰が電話してきたんだろう？」 (Coniglio 2008: 112)

本稿では、上述したような心態詞の統語論研究について、意味の二重性がどのように扱われてきたのかを、特に表示レベルとの関連において論じる。まず §2 では関連研究を概観し、その分析が心態詞と副詞のペアを同音異義語であるとみなしていることを確認する。続いて §3 ではこの分析が持つ問題点を指摘して当該形式を多義語とする研究を紹介し、先行研究と比較する。最後に §4 ではこうした分析をさらに推し進め、不明確性を伴う単義語として当該形式を理解する可能性について検討する。§5 は、議論のまとめである。

2. 心態詞の同音異義分析

心態詞はドイツ語をはじめとしたゲルマン諸語の文法研究において、Weydt (1969)以降、一分野として定着している。このうち対照言語学的視点から他言語における類似現象を扱う研究がロマンス語においても進展しており、たとえば Meisnitzer (2012: 353)は

次に挙げる表現をロマンス語における心態詞として扱っている。

(2) ロマンス語における心態詞

Pt. *afinal, sempre, lá, bem*

Cat. *bé*

Sp. *bien, pues*

Fr. *bien, quand même, donc*

It. *ben, pur, mai, poi*

Rom. *măi, păi, doar*

以下ではイタリア語における心態詞研究に限って論じる。イタリア語に関しては Radtke (1983)や Held (1988)がすでに心態詞の存在を指摘しているが、とくに Coniglio (2008)以降、次節で述べるような生成文法の枠組みにおける統語論研究と結びついて展開されている。

2.1. 生成統語論における心態詞

心態詞は文の描写する真理条件的な出来事、すなわち命題 (proposition) に影響を与えず、むしろ命題に対する話し手の心的態度に関わる意味を持っていることがしばしば分類的定義として挙げられている(Thurmair 1989 等を参照)。生成文法の枠組みにおいて命題を超えて談話や文脈の領域に属する表現を対象とした研究は少なくとも Chomsky (1970)や Jackendoff(1972)に遡るが、Bayer et al. (2015a)が指摘するように、とりわけ Rizzi (1997)以来カートグラフィー・アプローチと呼ばれる手法が注目されている。このアプローチは焦点や主題といった 70 年代からしばしば論点になってきたカテゴリーに加えて、法性・発話の力・言語行為のような、より語用論的な現象を統語論の理論研究に組み込んで発展してきた(Cinque & Rizzi 2010 も参照)¹が、心態詞は典型的に談話に関わる現象の一つであることから、関連研究においてしばしば観察の対象となってきた。またこうしたアプローチにおける心態詞研究はすでに挙げた Coniglio (2008)や Meisnitzer (2012)に加えて、Ghezzi & Molinelli (2014)、Cognola & Moroni (2022)など、ドイツ語における心態詞研究をロマンス語に応用するものと合流して展開されており、ロマンス語学においても一つの下位分野を構成するに至っていると言える。

心態詞を統語論研究の射程に収めることを正当化するにあたって中心的な観察となってきたのは、これらの表現が命題を超えた意味を表すと同時に統語論的な制約を受ける点である。Coniglio (2014: 113)はこのことを、次の二点に要約している。

* 本研究は JSPS 科研費 24K16046 の助成を受けたものです。

¹ ただし、こうした要素を統語論によって捉える試みは Ross (1970)に遡る。また、特に近年のものは Speas & Tenny (2003)からも影響を受けている。

- (3) a. 心態詞は文が持つ発話の力を修正する。
 b. 心態詞は特定の文タイプにのみ現れる。

(3a)について、(1b)における poi の存在はたしかに、典型的に質問に用いられる形式を、ある種の間接言語行為として解釈させるにあたって決定的な役割を果たしている。同時に、(1a)における poi についてはこうした観察は成り立たず、その発話行為は該当表現の有無にかかわらず、典型的な文脈では断定型に留まる。他方、(3b)について、全ての心態詞が全ての文タイプと共起できるわけではないことは、Thurmain (1989)以来しばしば指摘されている。たとえば心態詞としての poi は(1b)のように疑問文に現れ、文タイプと密接に結びついた意味上の機能を果たしているのに対して、(1c)のような命令文には現れることができない。

- (1) c. *Telefonagli poi! (Dohi 2020: 3)

こうした観察は、統語構造の中に談話に関わる意味と対応する一連の機能範疇を想定するカートグラフィー・アプローチにおいて、心態詞とこれらの機能範疇の間に統語的な依存関係を想定する分析の提案とつながってきた。たとえば Zimmermann (2004: 20)は、ドイツ語の心態詞 wohl について次のように移動および文タイプ演算子 (Sentence Type Operator) との一致による分析を試みている²。この分析では、(LF において) CP 内に移動した wohl が文タイプ演算子 (ここでは平叙文 decl) と一致し、断定 (assert) ではなく推量 (assume) の言語行為を表現するために使われている。

- (4) Hein ist wohl auf See.
 a. [_{ForceP} decl_{speaker} [_{TopP} Hein [_{FinP} ist [_{VP} wohl [_{VP} auf See]]]]].
 b. [_{ForceP} wohl_i decl_{speaker} [_{TopP} Hein [_{FinP} ist [_{VP} t_i [_{VP} auf See]]]]].
 ↑ └──────────┘

「ハインは海にいるだろう。」

これに対して、心態詞と形式を同じくする副詞は命題の表現に貢献するのであって、発話の力を異なるものにするわけではない。こうした分析は(3)に要約されるような心態詞に特有であって副詞にはない性質を捉えるために提案されているのだから、対応する副詞は CP 内への移動や一致を起さず、VP 内に留まることになる。

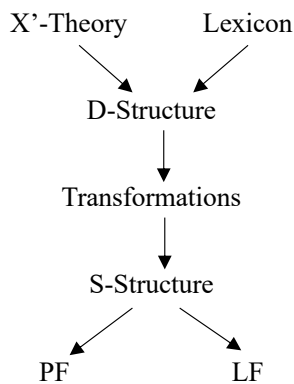
² これに対して、Bayer (2012)や Coniglio & Zegrean (2012)は異なるメカニズムを想定した分析を展開しているが、その差異は本稿の目的とは無関係のため扱わない。いずれの分析においても、談話標識がその意味機能を果たす仕組みは、談話標識が語彙項目として持っている性質に依存していることと、そうした性質に対応する副詞は持っていないことが前提視されている。次節も参照。

2.2. カートグラフィー・アプローチにおける意味の二重性

「語彙項目が持つ素性は一致を通して統語構造と意味解釈プロセスに影響を与える」 (“The features of lexical items interact through agreement to influence the shape of syntactic structure and the process of semantic interpretation”; Pesetsky & Torrego 2007: 262)。一致がその定義・性質からいって派生へ参加する語彙項目の間で起こる相互作用であることを考えれば、特定の要素との間に一致を起こす要素と起こさない要素は、たとえ同じ形式を持っていても、語彙目録から選び出した時点で異なる語彙項目として派生へ参加するものとみなしていることになる。

こうした先行研究の立場は、関連研究の多くが採用するカートグラフィー・アプローチそのものが想定する文の派生プロセスを反映している。Trotzke (2015: Ch. 3)が指摘するように、カートグラフィー・アプローチはいわゆる T モデル (図 1) を念頭に置きつつ、談話に関わる意味と対応する機能範疇を立てて、そうした意味が統語部門における計算結果として出力されるものとみなしている。

図 1 : T モデル (Trotzke 2015: 46)



Trotzke が指摘するように、こうした文法モデルでは意味解釈に関わるインターフェイス (論理形式、LF) への出力は統語部門の計算を終えたのちに一度だけ行われる³。したがって、談話に関わる意味を出来事的な意味と並行に扱うカートグラフィー・アプローチでは、前者も後者と同様に統語部門における計算の出力として現れてくることになる。すでに指摘したように、統語部門における計算を駆動する要因は派生へ参加する語彙が持っている素性なのだから、こうした分析は、意味について強い語彙主義的なアプローチをとっていることになる。以下ではこのモデルについて、生成統語論における理論の変遷および本稿の目的と直接関係しない部分を捨象し、意味解釈について「語彙目録からの取り出し」「統語部門における計算」「意味・解釈部門とのインターフェイス (LF)」

³ 生成統語論における文法モデルの変遷については Trotzke (2015: 43–46)に加えて Lasnik & Lohndal (2013)も参照。

の3点が関係していることを捉えるために、(5)のように簡略化して図示することにする。

(5) 語彙目録 → 統語部門 → LF

関連研究における主流なアプローチは、形式を同じくするが異なる語彙、たとえば(1)に挙げた poi であれば Poi_{MP} と Poi_{Adv} を想定し、談話/心態詞のペアを同音異義語であるとみなしている(poi について、Cardinaletti 2011; Cognola & Cruschina 2021 など)。こうした、いわば心態詞の同音異義分析では、本稿が問題にするような意味の二重性は語彙目録のレベルにおける語彙の選択に帰せられていることになる。

3. 心態詞の多義分析

3.1. Manzini (2015)による再分析

カートグラフィー・アプローチは、その記述力について評価される一方で(Bayer et al. 2015a)、とりわけ極小主義との整合性に関して批判されてきた(Jackendoff 2002; Newmeyer 2009)。同様に、同アプローチを前提とする心態詞の同音異義分析についても、これを見直す研究が登場してきている。特に Manzini (2015: 97)は同一の形式に対して異なるカテゴリーを割り当てる分析について、「記述・規範文法的」(“similar to those of descriptive or normative grammars”)であるとして批判し、本節で検討する再分析を提案している。こうした批判はすなわち、科学としての言語学が言語の説明を目指すのに対して、一つの直観的に観察できる意味に対して単に一つの範疇を当てはめる分析は記述に留まっており、可能な限りの一般化を目指す態度との齟齬があるという指摘である。

さらに、同音異義分析は副詞と心態詞の間にある形式の一致や、両者が表す意味の間にある明らかな関連性についても弱い説明しか提供しない。実際、心態詞と対応する副詞が表す意味はかなりの程度接近することがある。(6)は表現される命題と共通点のある別の命題を前提にする副詞読み(6a)と、表現される命題と矛盾する肯定形の命題を前提とする心態詞読み(6b)の間であいまいであるが、一方でこれらの解釈の間になんらかのつながりがあることは明らかである(cf. Abraham 1991a; 下に見る Manzini の議論も参照)。こうした関係に関する観察はしばしば心態詞の通時的研究において、その副詞からの派生に関する議論につながってきたが(Hentschel 1986; Abraham 1991b など)、同音異義分析はこうした関係について、単に通時的なつながりを指摘する以上の説明を提供することができない。

(6) Non siamo poi così lontani dalla verità. (Bazzanella 2001: 226)

- a. 「また、我々はそこまで真実から遠いというわけではない。」
- b. 「結局のところ、我々はそこまで真実から遠いというわけではない。」

こうした先行研究の問題点を背景に、Manzini (2015)は心態詞と副詞のペアを同音異義

語とみなさず、単一の語彙項目とする分析を提案している(またこの立場を支持するものに D’Antuono 2020)。この分析の特徴は、心態詞読みではなく副詞読みを再分析している点にある。Manzini は、心態詞と形式を同じくする副詞はしばしばそれ自体が非指示的な意味を表現することを観察している。たとえば次の文では *poi* が時間の副詞として使われているが、この語が持っている意味が談話ではなく命題のレベルに位置付けられることは明らかである一方で、その意味が同じ文に現れる *tavola rotonda* 「会議」のような典型的に指示的な表現と同じ性質を持っているとは言いがたい。

- (7) È seguita *poi* una tavola rotonda con gli esperti [...] (Cognola & Moroni 2022: 41)
「続いて専門家との会議が行われた。」

poi が(6a)のように時間軸上の前後関係ではなく論理的な前後関係を表すケースが存在することもあわせて考えれば、この副詞が持つ文全体の解釈に対する貢献はある種の、典型的・直観的には前後関係として理解できるような関係を特定することにあると言える。Manzini (2015: 111)は、この関係を‘then’の関係と呼んだ上で、*poi* の副詞読みを‘then’関係が出来事 E と先行する E’の間に成立しているものとして、(8)のように形式化している。

- (8) ‘then’ (E’, E)

Manzini はさらに、*poi* の心態詞読みにおいても同様の‘then’関係が存在しているが、その関係は出来事の間ではなくむしろ話し手による質問の言語行為 (Q) と、聞き手が発話を受けて解釈のために利用する文脈上の前提知識の間に成立していると主張している。Manzini (2015: 111)は後者に Stalnaker (1978)の共通基盤 (Common Ground, CG) の概念を採用した上で、疑問文における *poi* の心態詞読みを(9)のように形式化している⁴。こうした分析は、単一の語彙項目に対応する複数の解釈を想定する多義分析であると言える。

- (9) ‘then’ (CG, Q)

3.2. Manzini (2015)における意味の二重性

Manzini は共通基盤と言語行為の間に‘then’の関係が成立することで(1b)の「回答不可

⁴ *poi* は疑問文だけでなく、*se* 「もし」や *magari* 「ことによると」を用いて願望その他を表現する文にも現れる。Manzini (2015)はこのことから、*poi* の心態詞読みの形式化に質問だけでなく願望の言語行為その他を含めているが、ここでは省略する。

- (i) Magari *poi* piovesse davvero!
「本当に雨が降ったならなあ！」 (Manzini 2015: 108)

能性」解釈が生み出されるメカニズムについては詳細に考察していない⁵。またより一般的に、心態詞は現れる個別の言語、また同一言語内においても個別の語彙が持つ独自性が大きく、まさにその不均一性が特徴としてしばしば挙げられる(Fischer 2006 も参照)。Manzini はケーススタディとしてイタリア語の *poi*, *mai*, *pure* を分析しているが、これら三つを含む個別の語彙についての詳細な検討は課題として残されている。

一方で、Manzini (2015: 111–112)が自ら強調するように、(8-9)における分析の特長は *poi* が語彙として持つ意味 (denotation) を出来事と談話 (言語行為) の対立から切り離している点にある。§2 で見たように Poi_{MP} と Poi_{Adv} を異なる語彙項目とみなす同音異義分析の最も自然な帰結は、心態詞 *poi* の語彙として持つ意味がもたらされる言語行為の変化と直接結びつけられるもの (「質問の言語行為 Q にある種の修正を加えよ」) であるというものである。この立場は心態詞の存在が発話行為と強く結びついているという直観と矛盾なく同居するが、一方で、すでに前節で指摘したような副詞読みと心態詞読みの関連性を捉えることができない(語彙の意味を言語行為と直接結びつける見方への批判は、König & Requardt 1991 も参照)。これに対して、(8-9)では単一の語彙項目 *poi* が持つ意味 (「*then*」の関係が成り立つ) が間接的に異なる解釈を生み出しており、したがって双方の読みの間にあるつながりを無理なく包含できる点で、より経験的に妥当であると言える。

表示レベルについて見ると、この提案では、副詞読み(8)と心態詞読み(9)は *poi* が持つ語彙的な意味ではなくその作用域、すなわち「*then*」関係が成り立つ領域の違いに還元される。Manzini (2015: 112)は、こうした作用域の違いが統語部門のあいまい性解消メカニズムにおいて決定されると主張している⁶。この主張によれば、*poi* が出来事に対応する vP を作用域にとったものが副詞読み、文タイプ表示を含む文全体に対応する CP を作用域にとったものが心態詞読みとなる。したがってこの提案では、二つの意味の違いは (作用域決定を含む) 統語計算の出力である論理形式 (LF) に反映されることになる。

4. 心態詞の単義分析へ向けて

§2 で検討した心態詞の同音異義分析は、副詞・心態詞に見られる意味の二重性を語彙のレベルに還元するものであった。つまり、形式を同じくするが異なる語彙項目 L_{Adv} と L_{MP} がそれぞれ統語部門における演算を経て、結果として副詞読みの論理形式 LF_{Adv} と心態詞読みの LF_{MP} が出力される派生プロセスを想定していることになる。このことを(5)の文法モデルにあてはめると、次のようになる。

⁵ 「共通基盤」の概念そのものについても、明確であるとは言えない(Kecskes & Mey 2008 も参照)。

⁶ Manzini (2015)は実際の解釈において読みの決定が行われるメカニズムについては詳細に検討していないが、量化詞について議論されているようなもの(May 1977 を参照)を想定しているように思われる。

心態詞における意味の二重性については、すでに挙げた Schoonjans (2013) およびその注 14 を参照)が、命題と談話の間で両義的(多義的)な語は確かに存在する。次の例(12)では、副詞 *obviously* が様態を表す副詞として命題にかかる解釈(12a)と、文副詞として命題に対する話し手の評価にかかる解釈(12b)の間であいまいである。こうした *obviously* のあいまい性の解決は、Manzini (2015)が提案するような作用域の決定によって LF レベルで解消されているように思われる。

- (12) The cook obviously poisoned the soup.
a. The cook poisoned the soup in an obvious way.
b. It is obvious that the cook poisoned the soup. (Ifantidou-Trouki 1993: 202)

これに対して、*poi* の副詞読みと心態詞読みの間にあるあいまい性は、Manzini のいう ‘*then*’ 関係が成り立つ要素が未指定であるために生じていることを考えれば、*obviously* よりもむしろ *friend* のような不明確語に近い。実際、ちょうど *friend* について聞き手が意味をなす発話解釈を求めて「友人」の属性を推論する必要があるのと同じように、*poi* においても聞き手は ‘*then*’ 関係の成立する範囲を推論によって特定する必要があるのである。こうした種類の、言語表現によって指定されていないパラメーターを埋めるための推論は、*book* や *obviously* のような多義語については行われたい。同時に、こうした推論は焦点や主題といった概念を遥かに超えて文脈依存的であって、定義からいって発話解釈に先立つものである文法による制約を想定することは困難というだけでなく望ましくない結果を招くように思われる。

4.2. 発話解釈における LF について

当該形式が持つ意味の二重性に関して、本稿で検討した二つのアプローチの共通点は、LF レベルにおいて異なる表示 (LF_{Adv} , LF_{MP}) を想定していることにある。一方、Recanati (2010)が指摘するように、生成統語論における LF^8 は、それ自体が次のプロセス、すなわち発話解釈への入力でもある。Chomsky (1976)は LF を文法によって生み出される意味特徴をすべて取り込んだものとして捉えており⁹、他方、LF は他の認知システムの働きによって信念や予測といったものを含むより幅広い解釈と結びつくものとしている¹⁰。こうした観点から見ると、関連研究は、語用論の意味と文法の相互作用を前提に、「どこま

⁸ より正確には、統語部門による演算の結果として出力されてくる統語構成物としての LF ではなく、その論理表示への写像(Chierchia & McConnell-Ginet 1990 のいう *lf*)。

⁹ “I will understand LF to incorporate whatever features of sentence structure (1) enter directly into semantic interpretation of sentences and (2) are strictly determined by properties of (sentence-) grammar.” (Chomsky 1976: 305–306).

¹⁰ “there is a system of rules that associates logical form and the products of other cognitive faculties with another system of representation [...], which may involve beliefs, expectations, and so on [...]” (Chomsky 1976: 306).なお Chomsky (1976: 306)は、次のようにも述べている：“some would argue that LF alone should suffice, but I leave that as an open empirical question”。

でを文法の産物をみなすか」を問うものであると言える。§2.1 に挙げた研究およびカートグラフィー・アプローチ、また Manzini (2015) も、この問いに関して文法主義的な立場をとっている。

近年ではたとえば Chierchia (2004; 2017) がこうした問いを明確に発しつつ尺度推意が文法システムに組み入れられていることを主張しているが、一方で、言語行為や話し手の命題に対する心的態度のような要素に関する文法主義的な立場の妥当性には疑問の余地が残る。たとえば、話し手の心的態度は命題内容によって左右されることがある。次の例における形容詞 *presunto* は命題においては単に指示対象となっている人物が被害者であると推定している者が存在することを表しているに過ぎないが、まさにそのことを表しているという事実から、話し手（書き手）による命題内容への疑念や不同意を表現し得る。

(13) *La presunta vittima dice di aver lasciato l'appartamento [...]*

「被害者とされる者は部屋を去ったと述べている」

(https://www.repubblica.it/spettacoli/people/2023/07/10/news/kevin_spacey_accuse_predata_re_sessuale-407283886/)

一度得られた LF に対してもう一度規則を適用するような再帰的な文法モデルを想定しない限りは、言語行為や心的態度は、統語部門の演算における文法規則の適用だけではなく、その出力としての LF を入力とするような別個のメカニズムによって同定されていると考える方が理にかなっている。またこうした観察が示唆するのは、LF が少なくとも心的態度に関して、その後にくる発話解釈による最終的な同定を前提にした不十分な情報しか含んでいないということである (Carston 2002 も参照)。このことを踏まえると、心態詞を含む文についても同様に、LF のレベルではその副詞読みと心態詞読みが確定しておらず、その後に行われる発話解釈においてあいまい性が解消される分析を採用することが可能であるように思われる。下に(14)として形式化するこの分析では、単一の語彙項目をもとに行われる統語部門の演算を経た LF においてもまだ読みは確定しておらず、聞き手の発話解釈によって初めて二つの読み R_{Adv} と R_{MP} に分岐する。

(14) 心態詞の単義分析

L → 統語部門 → LF (→ 発話解釈 → R_{Adv}/R_{MP})

4.3. 極小主義プログラムと心態詞の単義分析

極小主義プログラムでは、とくに Hauser et al. (2002) による広義の言語機能と狭義の言語機能の区別や Chomsky (2005) による言語機能における三要因の提案以降、統語演算における言語固有の原理を可能な限り排して、より一般的な原理に還元していく研究戦略が採られている。藤田 (2017) が述べるように、現在、こうした路線を採用した言語現

象の再分析が行われているが、このような研究動向の中に位置付けたとき、統語部門の役割をより少なく見積もり、言語固有でない解釈・推論システムにあいまい性の解消を任せる(14)の分析は、理論内的な観点からより望ましいものとなる可能性がある。

一方で、心態詞の単義分析は必然的に従来の分析よりも強く、また特定の働き方をとする推論の力を想定している。こうした推論についての理論としての語用論と生成文法の関係については Chierchia (2004) が新グライス学派の語用論に言及するほか、後期グライス学派(関連性理論)について Recanati (2010)や Carston (2000)も論じており、また新グライス学派と関連性理論の関係については Horn (2006)などがある。典型的に統語論と語用論にまたがる心態詞のような現象の研究は、極小主義的な立場においては、統語論の外側にあるこうした理論研究の中にも同時に位置付けつつ行われるべきものであると言える。

その上で、心態詞の単義分析が実際に望ましいものであるかは、文法モデル、とくにその言語運用とのインターフェイスに対する見方と、(2)に挙げたような個別の語彙に対する分析・説明の妥当性を加味して決定されるべき問題である。前者については、生成文法における文法モデルは必ずしも一定しない(注3を参照)が、その中には表示レベルとしての LF を完全に廃しているものもある(Smith & Allott 2016: chap. 2、およびその注 161 に挙げられている文献を参照)。また後者については、不十分な情報しか持たない LF を入力とする発話解釈を経て最終的な読みが得られる過程をそれぞれの心態詞について明示的な形で示すことが、単義分析を採用した心態詞研究の課題である。

5. おわりに

本稿は形式を同じくする副詞と心態詞のペアについて、生成文法に基づく統語論がその意味をどの表示レベルに結びつけて論じてきたかについて扱った。20世紀終わり以降に大きく発展するカートグラフィー・アプローチに基づく研究は当該形式が持つ意味の二重性を語彙レベルのものとみなし、副詞と心態詞それぞれに異なる統語構造を想定する分析を展開している。これに対して近年、カートグラフィー・アプローチを批判してこの二重性を LF に結びつけるものが提案されている。

本稿は経験的妥当性と言語研究における記述から説明への移行という二つの観点から後者の分析を支持しつつ、一方ではどちらの分析も心的態度の表現に関する文法主義的立場に与していることを指摘した。その上で、命題と談話のレベルにまたがる不明確性の存在と、生成統語論における LF の性質を根拠に、意味の二重性を発話解釈レベルに結びつける、より強い立場が可能であることを示唆しつつ、その妥当性を評価するにあたって考慮すべき要因について検討した。

参考文献

- 中野弘三 (2017): 「語の多義性」中野弘三編『語はなぜ多義になるのか』朝倉書店, pp. 2-23.
藤田耕司 (2017): 「経済性理論から極小主義まで」畠山雄二編『理論言語学史』開拓社, pp. 58-115.

- Abraham, W. (1991a) : « Discourse particles in German: How does their illocutive force come about? », Abraham, W. (ed.), *Discourse particles. Descriptive and theoretical investigations on the logical, syntactic and pragmatic properties of discourse particles in German*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 203-252.
- Abraham, W. (1991b) : « The grammaticization of the German modal particles », Heine, B. & Traugott, E. C. (eds.), *Approaches to grammaticalization*, vol. II, Amsterdam: John Benjamins, pp. 331-380.
- Autenrieth, T. (2002) : *Heterosemie und Grammatikalisierung bei Modalpartikeln*, Tübingen: De Gruyter.
- Bayer, J. (2012) : « From Modal Particle to Interrogative Marker: A Study of German *denn* », Brugé, L., Cardinaletti, A., Giusti, G., Munaro, N. & Poletto, C. (eds.), *Functional Heads: The Cartography of Syntactic Structures*, Oxford: Oxford University Press, pp. 13-28.
- Bayer, J., Hinterhölzl, R. & Trotzke, A. (2015a) : « Issues in discourse-oriented syntax », Bayer, J., Hinterhölzl, R. & Trotzke, A. (eds.), *Discourse-oriented Syntax*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 1-12.
- Bayer, J., Hinterhölzl, R. & Trotzke, A. (2015b) : *Discourse-oriented Syntax*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Bayer, J. & Struckmeier, V. (2017) : « The status quo of research on discourse particles in syntax and semantics », Bayer, J. & Struckmeier, V. (eds.), *Discourse Particles. Formal Approaches to their Syntax and Semantics*, Berlin: De Gruyter, pp. 1-14.
- Bazzanella, C. (2001) : « I segnali discorsivi », Renzi, L., Salvi, G. & Cardinaletti, A. (eds.), *Grande grammatica italiana di consultazione*, vol. III, Bologna: Mulino, pp. 225-257.
- Cardinaletti, A. (2011) : « German and Italian modal particles and clause structure », *Linguistic Review* 28(4), pp. 493-531.
- Carston, R. (2000) : « The relationship between generative grammar and (relevance-theoretic) pragmatics », *Language & communication* 20(1), pp. 87-103.
- Carston, R. (2002) : « *Thoughts and utterances: the pragmatics of explicit communication* », Oxford: Blackwell Pub.
- Chierchia, G. (2004) : « Scalar implicatures, polarity phenomena, and the syntax/pragmatics interface », Belletti, A. (ed.), *Structures and Beyond*, pp. 39-103. Oxford: Oxford University Press.
- Chierchia, G. (2017) : « Scalar implicatures and their interface with grammar », *Annual review of linguistics* 3(1), pp. 245-264.
- Chierchia, G. & McConnell-Ginet, S. (1990) : *Meaning and grammar. An introduction to semantics*. Cambridge: MIT Press.
- Chomsky, N. (1970) : « Deep structure, surface structure, and semantic interpretation », Jakobson, R. & Kawamoto, S. (eds.), *Studies in General and Oriental Linguistics Presented to Shirô Hattori on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, Tokyo: TEC Company, pp. 52-91.
- Chomsky, N. (1976) : « Conditions on Rules of Grammar », *Linguistic Analysis* 2, pp. 303-351.

- Chomsky, N. (2005) : « Three factors in language design », *Linguistic inquiry*, 36(1), pp. 1–22.
- Cinque, G. & Rizzi, L. (2010) : « The Cartography of Syntactic Structures », *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, vol. 2, Oxford: Oxford University Press, pp. 51–65.
- Cognola, F. & Cruschina, S. (2021) : « Between time and discourse. A syntactic analysis of Italian *poi*. », *Annali di Ca' Foscari* 55, pp. 87–116.
- Cognola, F. & Moroni, M. C. (2022) : *Le particelle modali del tedesco. Caratteristiche formali, proprietà pragmatiche ed equivalenti funzionali in italiano*, Roma: Carocci.
- Coniglio, M. (2008) : « Modal particles in Italian », *University of Venice Working Papers in Linguistics* 18, pp. 91–129.
- Coniglio, M. (2014) : « The fine structure of Force: on the interaction of modal particles with illocutionary force and clause type », Cardinaletti, A., Cinque, G. & Endo, Y. (eds.), *On peripheries: Exploring Clause Initial and Clause Final Positions*, Tokyo: Hituzi Shobo, pp. 103–140.
- Coniglio, M. & Zegrean, I. (2012) : « Splitting up force: Evidence from discourse particles », Aelbrecht, L., Haegeman, L. & Nye, R. (eds.), *Main clause phenomena. New horizons*, Amsterdam: John Benjamins, 229–255.
- D'Antuono, N. (2020) : « The semantics of the italian adverb “magari”: a threshold-based approach to its polysemy », *Quaderni di Linguistica e Studi Orientali* 6, pp. 67–95.
- Dohi, A. (2020) : « CP-internal Discourse Particles and the Split ForceP Hypothesis », *Lingua* 223.
- Fedriani, C. & Sansó, A. (2017) : « Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles », Fedriani, C. & Sansó, A. (eds.), *Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 1–33.
- Fischer, K. (2006) : « Towards an understanding of the spectrum of approaches to discourse particles: introduction to the volume », Fischer, K. (ed.), *Approaches to Discourse Particles*, Leiden: Brill, 1–20.
- Ghezzi, C. & Molinelli, P. (eds.) (2014) : *Discourse and pragmatic markers from latin to the romance languages*, Oxford: Oxford University Press.
- Hauser, M. D., Chomsky, N. & Fitch, W. T. (2002) : « The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve? », *Science* 298, pp. 1569–1579.
- Held, G. (1988) : « Italienisch: Partikelforschung », Holtus, G., Metzeltin, M. & Schmitt, C. (eds.), *Lexikon der Romanistischen Linguistik, Band IV: Italienisch, Korsisch, Sardisch*, Tübingen: Niemeyer, pp. 63–75.
- Hentschel, E. (1986) : *Funktion und Geschichte deutscher Partikeln. Ja, doch, halt und eben*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Horn, L. R. (2006) : « More issues in neo- and post-Gricean pragmatics: A response to Robyn Carston's response », *Intercultural Pragmatics* 3(1), pp. 81–93.
- Ifantidou-Trouki, E. (1993) : « Sentential adverbs and relevance », *Lingua* 90(1–2), pp. 69–90.
- Jackendoff, R. (1972) : *Semantic interpretation in generative grammar*, Cambridge MA: The MIT Press.

- Jackendoff, R. (2002) : *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*. Oxford: Oxford University Press.
- Kecskes, I. & Mey, J. (2008) : « Introduction », Kecskes, I. & Mey, J. (eds.), *Intention, common ground and the egocentric speaker-hearer*, Berlin: de Gruyter Mouton, pp. 1–8.
- König, E. & Requardt, S. (1991) : « A relevance-theoretic approach to the analysis of modal particles in German », *Multilingua* 10(1–2), pp. 63–77.
- Lasnik, H. & Lohndal, T. (2013) : « Brief overview of the history of generative syntax », den Dikken, M. (ed.), *The Cambridge handbook of generative syntax*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 26–60.
- Manzini, M. R. (2015) : « Italian adverbs and discourse particles », Bayer, J., Hinterhölzl, R. & Trotzke, A. (eds.), *Discourse-oriented Syntax*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 93–120.
- May, R. (1977) : *The Grammar of Quantification*. MIT. (Ph.D. dissertation)
- Meisnitzer, B. (2012) : « Modality in the Romance languages: Modal verbs and modal particles », Abraham, Werner & Leiss, Elisabeth (eds.), *Modality and theory of mind elements across languages*, Berlin/Boston: De Gruyter, pp. 335–359.
- Murphy, M. L. (2010) : *Lexical meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, M. L. & Koskela, A. (2010) : *Key terms in semantics*, New York: Continuum International Publishing Group.
- Newmeyer, F. J. (2009) : « On split CPs and the ‘perfectness’ of language », Shaer, B., Cook, P., Frey, W. & Maienborn, C. (eds.), *Dislocated Elements in Discourse: Syntactic, Semantic, and Pragmatic Perspectives*, New York: Routledge, pp. 114–140.
- Pesetsky, D. & Torrego, E. (2007) « The syntax of valuation and the interpretability of features », Karimi, S., Samiian, V. & Wilkins, W. (eds.), *Phrasal and clausal architecture: Syntactic derivation and interpretation*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 262–294.
- Radtke, E. (1983) : « Gesprochenes Italienisch zwischen Varietätenlinguistik und Gesprächsanalyse », Günter, H. & Radtke, E. (eds.), *Varietätenlinguistik des Italienischen*, Tübingen: Narr, pp. 170–194.
- Recanati, F. (2010) : « Pragmatics and Logical Form », Romero, E. & Soria, B. (eds.), *Explicit Communication. Robyn Carston’s Pragmatics*, London: Palgrave Macmillan, pp. 25–41.
- Rizzi, L. (1997) : « The Fine Structure of the Left Periphery », Haegeman, Liliane (ed.), *Elements of grammar. Handbook of generative syntax*, Kluwer: Dordrecht, pp. 281–337.
- Ross, R. (1970) : « On declarative sentences », Jacobs, R. A. & Rosenbaum, P. S. (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, Waltham MA: Xerox College Publishing, pp. 222–272.
- Schoonjans, S. (2013) : « Modal particles: Problems in defining a category », Degand, L., Cornillie, B. & Pietrandrea, P. (eds.), *Discourse Markers and Modal Particles. Categorization and description*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 133–162.
- Smith, N. & Allott, N. (2016) : *Chomsky: Ideas and ideals. 3rd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.

- Speas, P. & Tenny, C. L. (2003) : « Configurational properties of point of view roles », Di Sciullo, A.-M. (ed.), *Asymmetry in Grammar, Vol.1: Syntax and Semantics*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 315–344.
- Stalnaker, R. (1978) : « Assertion », Cole, P. (ed.), *Pragmatics*, New York: Academic Press, pp. 315–332.
- Thurmair, M. (1989) : *Modalpartikeln und ihre Kombinationen*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Trotzke, A. (2015) : *Rethinking Syntactocentrism: Architectural issues and case studies at the syntax-pragmatics interface*, Amsterdam: John Benjamins.
- Viesel, Y. (2022) : *Discourse relations and information structure: Evidence from German discourse particles in embedded domains*. Universität Konstanz. (PhD dissertation)
- Weydt, H. (1969) : *Abtönungspartikel*, Berlin/Zürich: Verlag Gehlen.
- Zimmermann, M. (2004) : « Discourse Particles in the Left Periphery », *ZAS Papers in Linguistics* 35. pp. 543–566.

(最終原稿受理日 2025 年 3 月 13 日)

(どひ あつし / 東京外国語大学)